

万葉集における正訓文字の訓法

——ニアリ・ナリと訓むべき有・在——

鶴

久

ナリはニアリが一語化して行くにつれ、二重母音忌避の言語的性格による母音脱落、即ち融合縮約によって生じた語形であることに相違はない。しかし、言語の変遷は徐々に目に見えないほどであり、或程度の時期を経て、その変化に気づくのが普通である。したがって、変遷の過渡期においては二重形といふ現象が起る。いはば、万葉集におけるニアリ・ナリはその一例といふことができる。例へば、形容詞及び打消の助動詞ズに助動詞が承接する場合、直接承接せず、連用形にアリを介して承接するので、クアリ・ズアリが一語化して二重母音忌避による母音脱落を起し、カリ・ザリの語形を生じ、クアリ・ズアリとカリ・ザリが二重形をなした時期があったのと揆を一にしてゐるといへる。ただ、時代や語によって、また未然・連用などの活用形によって、カリ化・ザリ化に遅速が見られるやうに、ナリの場合もカリ・ザリに比して比較的早くから発生してゐるとはいふものの、語や活用形によって、その融合

縮約に差があることを見落してはならない。例へば、同じ憶良歌においても、

国尔阿良ば父とりみまし家尔阿良ば母とり見まし

(五・八八六)

(五・八〇四)

(五・八〇〇)

(五・七九四)

世の中や常尔阿利ける

つち奈良ば大君います

常奈利しゑまひまよひき

の如く、ニアリ・ナリの二重形が見られるのは過渡期の現象として当然なことであらうが、語によってはナリと融合縮約した確例が見られず、活用形によってもナリの現はれ方に偏りが看取されるのである。したがって、如何なる場合にナリと融合縮約し、如何なる状態ではニアリと未融合形のままであったかを明らかにすれば、一々の語例を検討考察することによって、万葉集のニアリ・ナリと訓まるべき有・在の施訓も或程度、決定されるのではないかと思は

れる。つまり、従来はほとんど恣意的と思はれるほど、その場その場に應じて融合縮約形にしたり、未融合形にしたりして施訓されてきた感があり、同一の注釈書においてさへも、同一語形においてニアリ・ナリの両訓が施されるなど施訓の態度に一貫性が見られない状態であつた。されば、今少し根拠に基づいた施訓が要求されるのであつて、本稿ではオモフ・モフと訓まれる思・念へ福田良輔教授退官記念論文集所載の拙稿、ワレ・アレ・ワガ・アガと訓まれる吾・我へ文芸と思想33号所載の拙稿に引続き、ニアリ・ナリと訓まるべき有・在について考察しようとするものである。

といっても、例へば、

大船に妹のるもの尔安良ませば (十五・三五七九)

梅の花み山としみ尔安里ともや (十七・三九〇二)

その夜はゆた尔有ましものを (十二・二八六七)

わが家の園尔阿利こせぬかも (五・八一六)

の如く、助詞ニとアリとが句を異にしてゐる場合は融合縮約は見られず、したがつて、

古昔有家武人の (三・三四七)

古尔有兼人も (四・四九七)

古尔有監人の (七・一一六六)

如是耳有家類物乎 (三・四五五)

如是耳有家流物乎 (十六・三八〇四)

の如きは傍訓のやうに未融合形に訓むべきこと、いふまでもない。問題は同一句中において、格助詞ニにアリが承接する場合である。即ち、歌といふ関係上格調がその訓を助けることは勿論であるが、ニアリと施訓して六音・八音になる場合、または融合縮約形にして定数音になる場合である。

一

この世には人言しげし来む世にもあはむわがせこ今不有十方 (四・五四一)

春風の音にし出でなばありさりて不有今友君がまにまに (四・七九〇)

かも川の後瀬しづけく後もあはむ妹には我は雖不今 (十一・二四三一人麻呂集)

ゆふだたみ田上山のさなかづらありさりてしも今不有友 (十二・三〇七〇)

の傍線部はほとんどの注釈書がイマナラズトモと訓んでゐるが、イマナラズトモ・イマニアラズトモの両訓が可能なところである。一期二期と三期四期といふ具合に時代的な新古により、ニアリと訓むか、ナリと融合縮約形で訓むか、考慮されるところであるが、ナリの語形はすでに、

このみ酒はわがみ酒那羅孺 (紀・巻五)
そがの子らは宇摩奈羅麼ひむかの駒多智奈羅麼くれの

まさひ

(紀・二十二)

わがせこが来べき豫臂奈利

(紀・十三)

天奈婁おとたなばたの

(紀・二)

吉備那流妹をあひみつるかも

(紀・十)

おしぬみのこの随智紀儼屢

(紀・十五)

いまき那屢をむれがうへに

(紀・二十六)

天那流やおとたなばたの

(記・上)

をつの崎那流ひとつ松あせを

(記・中)

このみ酒はわがみ酒那良ず

(記・中)

みもろのその高城那流おほいこが原

(記・下)

の如く、記紀の時代から存在し、一期二期の歌であるから未融合形にするといふことはできない。やはり、語句や活用形毎に判断するより他に方法はあるまい。イマナラズトモ・イマニアラズトモは一種の慣用的な用法であって、前掲の他に

一瀬には千たびさはらひ行く水の後にもあはむ今尔不

有十方

(四・六九九)

高湍尔有のとせの川の後もあはむ妹には我は今尔不有

十方

(十二・三〇一八)

の如き発想法・表現法の類似した事例がある。この二例は「尔有」と表記されてをり、表記字面からすれば当然イマニアラズトモと訓むべきであって、この例からすれば前掲の四例もイマニアラズトモと施訓するのが自然な訓法と見

なされる。しかし、「尔有」と表記した二例もナリと施訓

した注釈書もある如く、ナリの語源意識が「尔有」に表はれてゐると見なされぬこともなく、当時の人々の言語意識を意識的に文字用法において表示したと見られなくもない。安藤正次氏によれば、かかる例は当時の表記者の言語意識に基いた表記意識の顕現とも見られ、(萬葉人の言語意識についての一考察)、「高湍尔有」の事例が実在していることから、一応は首肯される。されば、右の二例も、ナリの確例とは必ずしも見なされないのではないかと思はれるやもしれぬ。しかし、「尔有」をナリと訓むべき事例があるとすると、「尔有」と表記されたものがすべてナリと訓まねばならないといふのではなく、例へば、

人の言こそ繁君尔有

(十二・三一四)

の如く、「尔有」と表記されてゐればむしろニアリと訓まれるのが普通であり、それが当を得てゐることは、

人のことこそ繁君尔阿礼

(四・六四七)

の一例に照合することにより明らかであらう。したがって、ナリと訓むべき場合こそ意図的な表記と見なされるのである。しかして、「いま尔有ずとも」をナリと融合縮約形で訓まねばならない証拠はなく、集中の表記傾向に照合すればニアリと未融合形に訓むのが自然な訓法である。つまり、前記の二例はイマニアラズトモと訓むのが穩当であり、本項の冒頭に掲げた四例も、ナリ・ニアリのいずれも

可能であるとはいへ、融合縮約形に訓むべき根拠が極めて稀薄である以上、イマニアラズトモと訓むのが当を得た訓法と思はれる。加へて、

ま玉手の玉手さしかへあまた宿もいねてしかも秋尔安良受登母 (八・一五二〇憶良)

天の川橋わたせらばそのへゆもい渡らさむを安吉尔安良受得物 (十八・四一二六家持)

は、ニアラズトモと施訓した傍証例にはなるであらう。ただ、

高圓のを花吹きこす秋風に紐ときあけな多太奈良受等母 (二十・四二九五池主)

の如き融合縮約形の例を看案すると、参考にすぎないやうに思はれる。しかし、

よしゑや雖不直ぬえ鳥のうらなげをりて告げむ子もがも (十・二〇三一一人麻呂)

海ながら然直有目 (十三・三三三二)

の傍線部の施訓の場合には、用例として活用されるであらうが、へこの例については後に述べる。これこそ語句の相違に基づくものであり、

うつつにし多太尔安良称婆 (十七・三九七八家持)

多太尔安良称婆恋やまずけり (十七・三九八〇家持)

を加味するとき、家持に比して池主は新しい語形を用ゐる傾向もあり、古語を使用することは少ないから、池主のタ

ダナラズトモをイマナラズトモと訓む根拠にすることはできないやうである。

二

何時にか妹をむぐらふのきたなき屋戸に入れいませむ (四・七五九)

何名におふ神にたむけせばあが思ふ妹を夢にだに見む (十一・二四一八)

何日の時にかもわぎもこが裳引の姿朝にけに見む (十二・二八九七)

の傍線部は諸注一致してイカナラムと訓まれてゐる。しかし、イカナラムと未融合形にしても何等差支へないところ、イカナラムを定訓とすることはできない。「イカナラム」は

妹の名をこのせの山に懸者奈何将有 (三・二八五)

かへば伊香尔安良牟 (三・二八五ノ一云)

うつつに見てば益而如何有 (十一・二五五三)

かくしあらばしゑやわがせこ奥裳何如荒海藻 (四・六五九)

の如く、すべて未融合形であり、

はつはつに人をあひ見て何将有いづれの日にかまたよそに見む (四・七〇一)

何在年月日にかつつじ花にはへる君が (三・四四三)

たまさかにわが見し人を何有依をもちてかまた一目見む
(十一・二三九六)

の傍線部も普通イカナラムと訓まれてゐるが、塙書房万葉集のやうに、イカナラムと未融合形に訓むのが良いと思はれ、前記の「何」もイカナラムと訓むのが自然な訓法ではあるまいか。特に二八九七番と上二句を全く同じくした

伊可尔安良武日の時にかも

(五・八一〇)

の傍証例を考慮するとき、少なくとも二八九七番歌の何はイカナラムと訓むべきことほぼ確実視することができ、したがって、他の二例の何もイカナラムと訓むのが当を得た施訓と見なされる。

ところで、諸注イカナルと訓んでゐる次の例は如何であらうか。

如何有哉人の子ゆゑぞ通はすもあご

(十三・三二九五)

幸の何有人香黒髪ひとかの白くなるまで妹が音を聞く

(七・一四二)

何有人か物もはずあらむ

(十一・二四三六)

空ごとを何在と言ひて君をし待たむ

(十一・二四六六)

面わすれ何有人のするものぞ

(十一・二五三三)

訓の明確な事例は

こころびき伊可奈流勢奈可わがり来むといふ

(十四・三五三六)

伊可尔安流ふせの浦ぞも

(十八・四〇三六)

と融合縮約形・未融合形ともに存在し、イカナル・イカニアル何れも可能と言へる。イカナルが東歌の例であることからすれば、一見イカニアルと未融合形に訓むのが良ささうに思はれる。が、イカナラムの場合と違って確実性はかなり薄く、一応条件付で、イカニアル・イカニアリと訓んでおく。

三

(a) なかなかに君に恋ひずは枚の浦の白水郎有申尾玉藻あましき

(十一・二七四三)

(b) おくれゐて恋ひつつあらずは田子の浦の海部有申尾玉藻あましき

(十二・三二〇五)

(c) 長き夜を君に恋ひつつ生けらずは咲きて散りにし花有益乎ましき

(十・二二八二)

(d) かく恋ひむものと知りせば夕おきて且は消ぬる露有申尾ましき

(十二・三〇三八)

右の(a)~(d)の有は現在ほとんどナラと訓まれてゐる。有字はナリ・ニアリ何れにも訓めるから、ニアラと訓んでも差支へないところではあるが、諸注がナラと訓んでゐる理由は判然としない。付度されることは融合縮約形ナラと訓め

ば格調上七音の定数音になり、音数律において格調が整つてゐるといふことである。しかし、ニアラと施訓しても単独母音を含む八音で格調上の齟齬はきたさない。諸注ほぼ一致して「——ニアラマシヲ」と施訓してゐるのは

玉の緒の念ひ乱れて家在矣いへにあらましを

(七・一二八〇)

だけである。イヘナラマシヲでは家にゐるといふ実質的意味が少々薄れて感じられるからであらう。それならば(a)の四例もニアラと未融合形に訓んで一向差支へないどころか、むしろニアラの方がより適切であるやうに思はれる。ただし、「——ニアラマシヲ」の仮名書例はない。

妹背の山あらましもの有あらましもの益物乎

(三・五四四)

其夜はゆたあらましもの有あらましもの益物乎

(十二・二八六七)

の如きはニアラマシヲの例ではあるものの、これは同一句中における例でなく、二句にわたつての例であるから、確実な用例とすることはできない。しかしながら、

君が家の池に住むといふ鴨かもにあらましを二有益雄

(四・七二六)

朝にけに妹がふむらむ地つちにあらましを尔有益尾

(十一・二六九三)

は表記字面上「——ニアラマシヲ」の事例であり、この例によれば、「——ナラマシモノヲ」の事例が皆無であるのと相俟つて、(a)と(d)も「——ニアラマシヲ」と訓むのが良ささうに思はれる。後者の「地尔有益尾」は注釈書によつては「ツチナラマシヲ」と融合縮約形に訓んでゐるが「鴨二有益雄」は諸注未融合形に施訓してをり、用例として差

支へあるまい。二六九三番歌にしてもツチナラマシヲと訓まねばならぬ理由根拠はない。加へて、(a)の歌には

なかなか君に恋ひずはなはの浦あまにあらましを海部尔有益男玉藻
苅る苅る
(十一・二七四三或本歌)

と、(a)の歌と少々表現を異にした同一歌へ少なくとも異伝歌があり、問題の部分は全く一致してゐるので、或本歌にアマニアラマシヲとなつてゐるからして(a)歌もアマニアラマシヲと訓むの良いと思はれる。ただ「尔有」は語源意識に基いた表記であり、ナリを表はしたものと考へられなくはないため、注釈書によつてはアマナラマシヲと訓んでゐるものもあるが、この場合に「尔有」をナリと融合縮約形に訓まねばならぬ必然的理由はなく、やはりアマニアラマシヲの確例として傍証例とすることができ、更に発想法・表現法を同じくし、下二句が全く一致してゐる(b)の用例にもすることができて、(b)もアマニアラマシヲと訓むべきと思はれる。(c)の歌も、発想法・表現法の酷似してゐる

わぎもこに恋つつあらずは秋はぎの咲きて散ぬる花はな尔あらましを有あらましを猿尾
(二・一二〇)

からして、ハナニアラマシヲと訓むべきであらう。一二〇番歌も前述した「尔有」と同様ナラと訓めなくもないからして、注釈書によつてはハナナラマシヲと訓んだものもあるが、さう訓まねばならぬ理由根拠は皆無に等しく、既述

してきた点からすれば、表記字面に忠実にニアラと未融合形に施訓するのが良く、十分に(c)の傍証例となり得る。されば、(d)の歌も何もツユナラマシヲと融合縮約形に訓まねばならぬ必然性はなく、アラマシヲがニに承接して、融合縮約をした確例は集中に見当らず、万葉集では、ニアラマシヲの融合縮約形は少なくとも普通ではなかったものと見られ、(d)もツユニアラマシヲと訓むのが当を得てゐるであらう。

みけつ国志麻乃海部有之^{しまのあま}ま熊野の小船に乗りて沖へ漕ぐ見ゆ
(六・一〇三三)

の傍線部も従来ナラシと融合縮約形で訓まれてゐる。

世の中はかくのみ奈良之

(三・四七八、五・八〇四の一云)

世の中はかくのみ奈良志

(五・八八六)

うつせみもかくのみ奈良之

(十九・四一六〇)

およしをばかくのみ奈良志

(五・八〇四)

の如き、ナラシの確例を加味してのことであらう。そして、

いそはく見れば神随尔有之
をナラシと訓んでゐるのも

(一・五〇)

見れどあかず加武賀良奈良之^{かむかちならし}

(十七・四〇〇一)

を考慮してであらう。加へて、一〇三三番歌は格調上、単独母音アを含んだ八音であり、もし、ニアラシと訓めば単

独母音を二個含んでゐるとはいへ、九音になるからナラシとしたのであらうが、九音でも単独母音を二個含んでゐる場合、字余りの例外にはならず、そのやうな事例は集中にもまま存在し、ニアラシと訓めなくもない。

船二四有良信

(六・九三四)

安須二之安流良之

(二十・四四八八)

方西有流良思

(四・五四七)

酒西有良之

(三・三四二)

酒西有良師

(三・三四〇)

待常二師有四

(四・七九二)

恋跡二四有四

(十二・二九四二)

は助詞ニシを介在してをり、したがって、二語意識が強く、融合できにくい面があることは当然のことであるが、「武庫の海の船尔波有之(二・二五六の一本云)」はフネニハアラシである。フネニハナラシと訓んだものもあるが、フネニハアラシと訓むべきところである。つまり、常に融合縮約したと限らないわけである。

山之名尔有之

(七・一〇九七)

宇毛乃葉尔有之

(十六・三八二六)

は助詞尔を表記してゐるためか、ニアラシと訓まれてゐる例である。ところで、

おのが尾にふりおける霜を掃等尔有斯^{はらもと}

(九・一七四四)

はナラシと訓んだものもあるが、現在多くニアラシと訓まれてゐる。「加武賀良奈良之（十七・四〇〇一）」から「神随尔有之（一・五〇）」をカムガラナラシと訓むほどならばヘカムナガラナラシと訓む注釈書も多いが、普通ナガラと訓まるべき随を使用してはゐるものの、ナガラがニアリ・ナリを直接下にとることはなく、この場合カムガラとしか訓めず、カムガラナラシが正鵠を得てゐる。「掃等尔有斯」も「思流須登奈良思（十七・三九二五）」「聞跡平（十一・二八一）」からハラフトナラシと訓んでも良ささうであるが、未融合形に施訓したのは前述の一〇九七番、三八二六番歌の「尔有之」と同じく尔と助詞を明記してゐるためであらう。かく、ニアラシは場合によっては融合しないこともあり、当面の問題歌もアマナラシと訓まねばならなといふこともない。同様に、

わがせこが袖反す夜の夢有之まことも君にあへりし如し
(十一・二八一三)

かりがねの寒き朝けの露有之春日の山をもみたすものは
(十・二二八一)

も従来ナラシと訓まれてゐるが、ニアラシと訓めないこともなく、融合縮約に訓むにせよ、未融合形に訓むにせよ、可能性は五分五分で条件付きといふことになる。

打そを麻統王白水郎有哉いらこの島の珠藻かります

(一・二三)

は従来ナレヤと訓まれてゐるが、同じくナレヤと訓まれてゐる

山のまゆ出雲の子らは霧有哉

(三・四三九)

潮みてば入ぬる磯の草有哉

(七・一三九四)

偲ふらむ其人有哉

(十一・二五六九)

とともに、

にこ草の波奈都豆麻奈礼也

(十四・三三七〇)

思ふらむ其子奈礼夜母

(十九・四一六四)

からして、さして的是をはづれてゐないと思ふ。ただし、

しましくも一人ありうる毛能尔安礼也

(十五・三六〇一)

あはしまのあはじと思ふ伊毛尔安礼也

(十五・三六三三)

を参照すれば、アマニアレヤと訓めないこともなく、条件付で、一応アマナレヤと訓むことにする。因みに、

家人の使在之春雨のよくれど我を沾らさく思へば

(九・一六九七人麻呂集)

の傍線部は旧訓ツカヒナルラシであつたが、代匠記精撰本がツカヒニアラシと訓んで以来、諸注旧訓と代匠記の何れかの訓を踏襲して現在に至つてゐる。旧訓はツカヒニアルラシが融合縮約したものであり、アルラシはアラシより新しく発生した語形で、集中でも古い歌には見られず、ツカヒナルラシには抵抗を感じる。ツカヒニアラシは単独母音

を含んだ七音でこれまた準不足音句になり、前記した「待つと二師有^{にしあらし}四^し（七九三）」「恋ふと二四有^{にしあらし}四^し（二九四二）」をはじめ「ニシ＋形容詞終止形」は一種の構文法をなしてをり、ここはニだけでなくニシを訓み添へてツカヒニシアラシと施訓するのが意味上・格調上の難点を解消した自然で穏当な訓といふべきであらう。

四

既述の点からも推察されたことであらうが、ニアリをナリと融合縮約させるか、未融合形のままで訓むかは、多分に格調とも関連してゐる。定型韻律は和歌の性質上当然のことではあるが、従来の施訓は未融合形で五音・七音の定数音であれば融合縮約形にすれば不足音となるため未融合形にし、未融合形で六音・八音になる場合はへ字余りになるため融合縮約形にする傾向がかなり強く看取される。

かくつぎて常丹有^{つねにありせば}背者

（六・九四八）

袖まきかへてさ宿し夜や常尔有家類^{つねにありける}

（八・一六二九）

常将有^{つねにあらむと}等あがもはなくに

（三・二四二）

常将在^{つねにあらむと}跡あがもはなくに

（三・二四四）

わが命も常有^{つねにあらぬか}奴可

（三・三三二）

は諸注も傍訓の如く未融合形に訓んでをり、それで定数音であつて、「世の中や都称^{つねにありける}尔阿利家留^{ありける}（五・八〇四）」「一

つ松比登^{ひとにありせば}邇阿理勢婆^{ありせば}（記・中）」等に照合して誤つてはゐないであらう。しかるに、

たきの床磐の常有^{つねにあらぬか}沼鴨

（六・九二二）

かく恋ひばまことわが命常有^{つねにあらぬか}目八方^{めやも}（十・一九八五）は諸注融合縮約形にしてナラと訓んでゐる。勿論、それで七音の定数音になるからして抵触はないやうであるが、ツネニに承接したアリは実質的な存在の意を有してをり、現代語の「である」という指定の意ではない。存在の意を有する場合は融合縮約化しないやうである。ツネニアリの場合がその一例と言へる。したがつて、

黒馬の来夜は常^{つねにあらぬか}二有沼鴨

（十三・三三一一）

の傍証例と相俟つて、前記の二例もツネニアラヌカモ・ツネニアラメヤモと訓むべきところである。定数音とは言へ、前述のツネニアリの事例も考慮してのことである。

子らが手を巻向山は常在^{つねにあり}常^{つねにあり}（七・一二六八人麻呂集）

もツネナレド・ツネニアレドの両訓があるが、ツネニアレドと訓むべきこといふまでもない。

日の御影の水こそは常尔有^{つねにあり}米

（一・五二）

はトコシヘナラメ・トコシヘニアラメ・ツネニアラメなどの訓があるが、未融合形に訓むべきことは変らない。ツネニアラメでは不足音になるから、大系のやうにトコシヘニアラメと訓むのが穏当であらう。ただ、例外は、

常有^{つねにあり}之あまひふるまひ

（三・四七八）

の家持歌の例であらう。諸注ツネナリシと融合縮約形に訓んでゐるが、それで間違つてゐないと思ふ。

都称奈利之^{つねなりし}ゑまひまよびき (五・八〇四の一云)

が傍証の役をはたしてゐる。巻五の八〇四番の憶良歌の「一云」の異伝歌は表記字母においても家持の手を強く感じさせられるが、

咲く花も移ろひにけり世の中はかくのみならし (三・四七八)

咲く花のうつろひにけり世の中はかくのみならし (五・八〇四の一云)

の二者を比考してみても、八〇四番の「一云」と四七八番の家持歌は無関係とは言はれず、「都称奈利之」(八〇四の一云)からして「常有之」もツネナリシと訓むべきこと大体明らかであらう。この場合のアリには存在の意は稀薄であること論を俟たない。

五

鮪つると海人船さわく塩やくと人曾^{ひとせ}左波^さ尔^に有^{あり}

(六・九三八)

の傍線部はサハニアル・サハナルの両訓が見られる。「尔有」はナルを表記したものとして、サハナルと訓んだのであらうが、サハニを「左波^さ尔^に」と一字一音の音仮名で表記している点からすれば「尔有」をナルの表記に当てたとは

考へられない。サハニを明確に仮名書してゐるところからして、「有」はアルと訓まるべきこと截然としてをり、この一首はサハニアルと未融合形に訓んだ注釈書に従ふべきである。

湯はしも左波^さ尔^に雖^{あれども}有^{あり} (三・三二二)

里はしも左波^さ尔^に雖^{あれども}在^{あり} (三・四六〇)

国はしも沢^さ二^に雖^{あれども}有^{あり} (一・三六)

高山は左波^さ尔^に雖^{あれども}有^{あり} (三・三八二)

は同様な表記をした例であり、サハニがアリと融合してサハナリとなった例が無いのと相俟つて、確例はサハニアリに限られてゐることは、右の「左波^さ尔^に有^{あり}」もサハニアルと施訓すべきこと、ほぼ決定的と思はれる。したがって、

国はしも多^{おほ}雖^{ども}有^{あり}里はしも沢^さ尔^に雖^{あれども}有^{あり} (六・一〇五〇)

も傍訓の如く施訓すべきことは前記の例から動かないところであるが、傍線部は従来諸注の多くがオホクアレドモなると訓んでいる。「多^{おほ}雖^{ども}有^{あり}」と「沢^さ二^に雖^{あれども}有^{あり}」は対句になつてをり、対句の用法からしてオホクアレドモでなく、サハニアレドモと訓みたいところである。多^{おほ}は沢^さ二^にに対して変字的用法をしたわけであり、前掲の一例「国はしも沢^さ二^に雖^{あれども}有^{あり}」(一・三六)に照合しても、同様な発想・表現においてオホクアレドモと訓まねばならぬ理由はなく、やはりサハニアレドモと施訓すべきところであらう。

衣しも多在南

(十一・二八二九)

にしても、オホクアラナムと訓んだ注釈書が多いが、多字はオホク、サハ両方に訓める文字であり、サハニアラナムと訓んで良からう。相手に対する願望を表はすナムがニアリについたニアラナムが融合縮約してナラナムになった例はなく、

わぎもこは衣丹有南秋風の寒きこの頃下に着ましを

(十・二二六〇)

わぎもこは久志呂尔有奈武左手のあがおくの手にまきて行なましを

(九・一七六六)

人言の繁き時にはわぎもこは衣有下に着ましを

(十二・二八五二)

の如くニアラナムであることを加味すれば、「多在南」に対する施訓は、格調もさることながらサハニアラナムとすべきであらう。

(ア)百船の過て行くべき濱有七国

(六・一〇六六)

(イ)世の人皆の常不有国

(十一・二五八五)

(ウ)後は誰が着む笠有魚国

(十一・二八一九)

右はニアリに打消の助動詞の久語法がついた例であるが、諸注ほとんどナラナクニと融合縮約形で訓んでゐる事例である。かかる場合の確例は

ねをぞ泣きつる手兒尔安良奈久尔

(十四・三四八五)

見ともあくべき宇良尔安良奈久尔

(十八・四〇三七)

越の海のこがたの海の島櫓名君

(十二・三一〇六)

なでしこの花のみとはむ伎美奈良奈久尔

(二十・四四四七)

難波渦雲居に見ゆる志麻奈良奈久尔

(二十・四三三五)

の如く、未融合形・融合縮約形ともに存在し、ナラナクニ・ニアラナクニ何れも可能性があり、必ずしもナラナクニと訓まねばならないといふことはない。(ア)は

見ともあくべき宇良尔安良奈久尔

(十八・四〇三七)

もさることながら、

思ひすぐべき君尔不有国

(四・六六八)

思ひすぐべき君尔有名国

(三・四二二)

を参照すれば、むしろ、ハマニアラナクニと未融合形に訓むべきかもしれない。もつとも、四二二番の例は新校・塙書房万葉集などキミナラナクニと訓んでゐるが、六六八番歌ではキミニアラナクニと未融合形に訓んでをり、両者を未融合形・融合縮約形に訓みわけるとき理由はなく、訓詁に一貫性を欠くやうに思はれる。更に、

思ひすぐべき孤悲尔不有国

(三・三二五)

思ひすぐべき恋尔有莫国

(十・二〇二四)

を参看すれば、より未融合形に訓むのが穩当のやうである。(イ)は前述した如く、ツネニがアリと融合縮約した例は極めて少なく、ツネナリシ(二例)でそれも家持に關係あるもので、特殊な例と考へられるから、(イ)もツネニアラナ

クニと訓むのが良いと思はれる。(ウ)は未融合形・融合縮約形いづれとも断定しにくい(ア)(イ)の例や

思ふらむ人^{ひと}尔^{にあらなく}有^あ莫^な国^{くに} (四・六八二)

一年に二度かよふ君^{きみ}尔^{にあらなく}有^あ勿^な久^く尔^に (十・二〇七七)

大荒木野の小竹^{しの}尔^{にあらなく}不^な有^あ九^{くに}二 (七・一三四九)

などを考慮すればカサニアラナクニと訓んで差支へなささうである。したがって、

浮田のもりの標^{しめ}尔^{にあらなく}不^な有^あ尔^に (十一・二八三九)

そこに障らむ吾^{われ}尔^{にあらなく}不^な有^あ国^{くに} (十二・二八八六)

もニアラナクニ・ナラナクニの両訓が見えるが、シメニアラナクニ・ワレニアラナクニと訓むのが良からう。

こきだくもしげく荒たるか久^{ひさ}尔^{にあらなく}有^あ勿^な国^{くに} (二・二三二)

こきだくも荒にけるかも久^{ひさ}尔^{にあらなく}有^あ名^な国^{くに} (二・二三四)

は諸注ほぼ一致して傍訓通りに訓んでゐるが、表記字面に對しても当を得てゐると言へよう。しかし、

(エ)とまりゐて吾^{われ}は恋^{こひ}ひむな不^な見^み久^く有^あ者^{もの} (九・一七八五)

(オ)鏡山^{みづ}不^な見^み久^く有^あ者^{もの}恋^{こひ}しけむかも (三・三一一)

(カ)若^わ久^く木^き我^{われ}久^く有^あ者^{もの}妹^い恋^{こひ}ひむかも (十二・三一二七人麻呂集)

の傍線部は諸注ほとんどヒサナラバと訓んでいる。(エ)(オ)は

君^{きみ}が目^めを美^み受^う比^ひ佐^さ奈^な良^ら婆^ばすべなかるべし

(十七・三九三四)

の用例があり、ヒサナラバと施訓して射てゐるものと思ふが、ヒサニアルは常に融合縮約形になるとは限らず、前記の如き未融合形も存在することを思ふとき、卷十二の人麻呂集の例にまで適用するのは如何であらうか。

久^く将^{まさ}有^あ君^{きみ}を思^{おも}ふに久^く方^{かた}の清^{きよ}き月^{つき}夜^よもやみのみに見^みゆ

(十二・三二〇八)

の傍線部も未融合形・融合縮約形いづれにも訓めるところであるが、諸注ほとんどヒサニアラムと未融合形に訓んでゐることは、一応考慮されてよからう。ヒサシはカリ活用化するにしても、他の語に比し遅く、平安初期迄もヒサシクアリであり、ヒサニアルのアリには実質的な意が多分に存在してゐることを思ふとき、ヒサニアリのニアリがナリ化するのに多分に抵抗があつたのではなからうか。そこで、

久^く有^あ今^{いま}七^{なな}日^ひだみ早^{はや}有^あ者^{もの}今^{いま}二^{ふた}日^ひだみ (十三・三三一八)

の対句の例を考へてみたい。傍線部は諸注「ヒサナラバ：ハヤカラバ」と訓んでゐるが、記紀は勿論集中でも、第一期・二期及び人麻呂集の歌において、形容詞のカリ活用・打消の助動詞のザリ活用の確例は見られず、卷十三の古い歌等にかり活用を適用するのは避けるべきである(万葉四十二号所載拙稿参照)。しかも、同様な発想法をした対句

知^ち加^か久^く安^あ良^ら婆^ば今^{いま}二^{ふた}日^ひだみ等^と保^ほ久^く安^あ良^ら婆^ば七^{なな}日^ひのをち

(十七・四〇一一)

の一例をあげただけでも、「早有者」をハクアラバと未融合形に訓むことは明白である。さればハクアラバと対句をなしている「久有」をヒサナラバと融合縮約形に施訓するといふのは、これまた対句の場合における例外的施訓になる。〈語文研究八号所載拙稿参照〉つまり、対句における場合の訓からして、ハクアラバに対する「久有」も当然ヒサニアラバと未融合形に訓むのが良く、巻十二の人麻呂集の例も同様にヒサニアラバと訓むべきものと思ふ。

君が行きもし久有者梅柳たれとともにかわがかづら

かむ

(十九・四二三八)

もヒサナラバ・ヒサニアラバと両訓があるが「尔有」と表記されてゐるところに、既述の点を加味するとヒサニアラバと訓むのが勝つてゐると思はれる。そして、前掲の(エ)の歌も諸注のミズヒサナラバの訓で当を得てゐるかと思ふが、意味や既述の諸点を総合した場合、ミズヒサニアラバと施訓するのがより当を得てゐるやうに思はれる。

六

体言をうけて接続助詞バに承接し、仮定条件を表はす場合

は

玉有者手にまきもちて衣有者ぬく時もなく

(二・一五〇)

玉有者手にまきもちて (三・四三六、四・七二九)

人有者母のまなごぞ (七・一二〇九)

宇治人のたとへの網代吾有者 (七・一一三七)

吾有者土には落ちず空にけなまし (十二・二八九六)

水有者しがらみ越えて (十一・二七〇九)

闇夜有者うべも来まさず (八・一四五二)

凡有者かもかもせむを (六・九六五)

の如く、諸注ほとんど傍訓の通り施訓してゐる。

都智奈良婆大君います (五・八〇〇)

思ふ故にあふもの奈良婆 (十五・三七三一)

の例からすれば、融合縮約形に訓んで一向差支へない。しかしながら、平城京出土の木簡によると

玉尔有波手尔麻伎母知而□□ (国語学76集所載の阪倉篤義氏の論文)

の如く「尔有」と表記した例もある。表記字母からすれば、当然ニアラと未融合形に訓むべきところであり、もし、ナラと融合縮約形を表記したものならば、当然木簡の性質上ナラと書いたであらうと見なされ、「玉有者」「衣有者」に限って、タマニアラバ・キヌニアラバと訓むことも可能であらうかと考へられる。ところで

家有者妹が手まかむ (三・四一五)

には、イヘナラバ・イヘニアラバの両訓がある。イヘニアラバと未融合形に訓んだ注釈書は如何なる理由に基いて施

訓したか明記してはゐないが、やはり、未融合形に施訓した方がよいと見なしてのことと忖度される。アリは指定といふよりも存在を表はす意が強いため、あへてイヘニアルと訓まれたのかもしれない。

国尔阿良波父とりみまし家尔阿良婆母とりみまし

(五・八八六)

の対句はまさに格好の傍証例である。

家有者^{いへにあれば}箭にもる飯を

(二・一四二)

も、確定条件と仮定条件の差はあるが、諸注に未融合形に訓んでいるのは正に当を得た施訓と言へるであらう。

家尔阿利^{いへにあれば}弓母がとりみば

(五・八八九)

家尔有之ひつにくぎさし

(十六・三八一六)

は傍証例となるであらうか。「家有」がイヘナルと融合縮約形になってゐるのは

伊弊奈流妹をまた見てももや

(二十・四四一五)

伊弊奈流妹にあひて来ましを

(十五・三六七一)

伊波奈流われは紐とかずねむ

(二十・四四四四)

伊波奈流妹はさやに見もかも

(二十・四四二三)

の如く、連体形の場合に限られ、「ゐる」といふ存在の意を有するニアリの融合縮約形が前掲した如く記紀にも「天ナル」「吉備ナル」「高城ナル」「いまぎナル」をつの崎ナル」と連体形に限って存在してゐるのと符号するところがあり、かなり早くから融合縮約してゐたことがわかる。意

味的にも存在の意は皆無とは言へないけれども「家の」「の」といふのに類似してをり、

家有^{いへにあれば}人も待恋ひぬらむ

(四・六五一)

おきまろが家在^{いへにあれば}物はうもの葉にあらし

(十六・三八二六)

家有^{いへにあれば}妹いおほほしみせむ

(十二・三一六一)

家有^{いへにあれば}妹をかけてしのひつ

(一・六)

在^{いへにあれば}家妹が待ちとはむため

(六・九七六)

家有^{いへにあれば}妹し常におもほゆ

(八・一四六九)

公之家有^{いへにあれば}尾花しおもほゆ

(八・一五三三)

めづらしき君之家有^{いへにあれば}花すすき

(八・一六〇一)

吾家有^{いへにあれば}梅のはつ花散りぬともよし

(十・二三二八)

の有・在を諸注のようにナルと訓むのは良いとしても、イヘニアラ(レ)バ・イヘニアリテを融合縮約形にする根拠とするには、意味上からも、多少の抵抗は覆ひ難い。しながら、連体形の場合でも、

伊弊尔安流妹し思ひかなしも

(十五・三六八六)

家尔有妹を忘れておもへや

(一・六八)

の如く、未融合形の確例があり、前記の有にしても中にはニアルと訓むべき例があるかもしれない。したがって、意味的にも確例からしても四一五番歌の「家有者」はイヘニアラバと訓むべきであらう。とすれば、

衣尔有者下にも着むと

(十二・二九六四)

もキヌナラバ・キヌニアラバ両訓があるが、「尔有」と表記してあることを考慮すると、未融合形に訓むのが良からう。

母の命の言尔有者

(九・一七七四)

の如く、コトニアラバと訓まれてゐる用例も参照されて、前記のナルと訓まれた「有」の事例はニアルとも訓める可能性を有してをり、ナルと訓むのも一応条件付といふことになる。

面形の忘戸有者

(十一・二五八〇)

の傍線部は右の本文のままでは

今のごとあはむ跡奈良婆この篋開くなゆめと

(九・一七四〇)

の事例からして、ワスルトナラバと訓まれるが、助詞トは乙類であるべきであるのに、甲類を表わす訓仮名戸を用ゐてゐるといふ難点もあり、増書房万葉集のやうに、戸は左の誤字として、へ事実、戸・左は草体では誤まれ易い、「忘左有者」とすることも考へられ、今後の問題にしておかう。

大船のまかぢしじぬき漕ぐほどもここだ恋るを年在いに
(十一・二四九四人麻呂)

は諸注トシニアラバと未融合形に訓んでゐるが、

等之尔安里弓一夜妹にあふ

(十五・三六五七)

年有而今かまくらむ

(十・二〇三五)

が参照され、トシニアリは融合してゐなかつたと見なさ

れ、当を得た訓と考へられる。

時不在過ぎにし子らが

(二・二一七人麻呂)

不時まだらの衣着ほしきか島の針原時二不有鞆

(七・一二六〇)

の傍線部は諸注にトキナラズ(ヌ)と訓まれてゐる。しかし、後者はトキニアラネドモの句を共存してをり、トキニアラヌとも訓む可能性があり、前者とともに未融合形に訓むべきではないかと思はれる。されば、

さぬかたの野辺の秋はぎ時^有者

(十・二一〇六)

も、トキニアレバと訓むべきかと思はれさうであるが、或いは諸注のやうにトキナレバと融合縮約形に訓むところかもしれない。しかし、ニアリに打消の助動詞ズがついた場合など特定の場合には偏りがあり、

秋風に紐ときあけな多太奈良受等母

(二十・四二九五)

雲居に見ゆる志麻奈良奈久尔

(二十・四三五五)

の如き融合縮約した例とともに、別に

いねてしかも秋尔安良受登母

(八・一五二〇)

い渡らさむと安吉尔安良受得物

(十八・四一二六)

見ともあくべき宇良尔安良奈久尔

(十八・四〇三七)

の如き未融合形の例もあり、更に、

うつつにし多太尔安良称婆

(十七・三九七八)

多太尔安良称婆恋やまずけり

(十七・三九八〇)

国尔不有者くにあらねば

(八・一五一五の一云)

遠妻の此間不有者とこにしあらねば

(四・五三四)

露霜の置いていにけむ時尔不有之天ときにあらずして

(三・四四三)

等を参照すると、トキニアラズ・トキニアラヌ(またはトキジクノ)と訓むべきところではなからうか。もっとも五三四・五四三番歌はココニアラネバ・トキナラズシテと訓んだ注釈書もあるが傍訓で誤りないところである。

一二之目耳不有

(十六・三八二七)

も一句二句の本文を「一二之」「目耳不有」とするにしても、「一二之目」「耳不有」とするにしても、傍線部の訓をノミニハアラズ・ノミニアラズと未融合形とすることだけは変るまい。

七

よしゑや雖不直ぬえ鳥のうらなげをりと告げむ子もがも
(十・二〇三一人麻呂集)

海ながら然直有目しか

(十三・三三三三)

の傍線部は前者をタダナラネドモ、後者をシカタダナラメ或いは直を真としてシカマコトナラメなどと訓まれてゐるが、タダニアリが融合縮約した例は「多太奈良受等母(二十・四二九五)」があるが、一方「多太奈良称婆(十七・三九八〇)」「多太奈良称婆(十七・三九七八)」の如き未融合形もあり、ツネニアリ・サハニアリ・ヒサニアリの

如きは実例からして融合縮約しにくかったと考へられ、人麻呂集歌や卷十三の古い歌であることを考慮すると、

あが身こそせき山越えて許己尔安良米ここにあらむ

(十五・三七五七)

大船の由多尔将有人の子ゆゑにゆたにあらむ

(十一・二三六七)

新世に共将有跡ともにあらむと

(三・四八一)

たづさはり共将有等ともにあらむと

(十九・四二三六)

の如き、諸注が傍訓の如く訓んでゐる事例も加味されて、タダニアラネドモ、タダニアラメと未融合形に訓むのが良いかと思はれる。

我が標結ひし枝将有八方

(三・四〇〇)

誰恋尔有目あれ恋ひ思ふを

(二・一〇二)

の傍線部はナラメヤモ・ナラメと訓んだ注釈書と、ニアラメヤモ・ニアラメと未融合形に訓んだ注釈書があるが、

秋はぎの四撻二将有妹が姿をしなひにあらむ

(十・二二八四)

すゑつゐに行きは別れず同緒将有おやじきにあらむ

(十一・二七九〇)

わがしめし野の花尔有目八方はなにあらむ

(八・一五一〇)

と諸注に訓まれてゐる事例を加味すれば、未融合形に訓んだ注釈書によるべきであらう。とすると、

あが恋ひ死なば誰名将有裳たがにならむ

(十二・三一〇五)

恋にも死なむ誰名将有哉たがにならむ

(十二・二八七三)

馬かはば妹步行将有いもかはらむ

(十三・三三一七)

も諸注傍訓の如く施訓してゐるが、ニアラムモ・ニアラメ

ヤ・ニアラムと未融合形に訓むのが当を得てゐるやうにも思ふ。

屋戸在桜の花は

(八・一四五八)

屋戸尔有桜の花は

(八・一四五九)

の傍線部はヤドナル・ヤドニアルの両訓があるが、この二首は厚見王と久米女郎の贈答歌であり、「屋戸在」に対して「屋戸尔有」としたものと見なされる。意味的にも「やどの」ではなく「やどにある」と存在を表示してをり、「屋戸尔有」はヤドニアルと訓むべきところであり「屋戸在」も当然ヤドニアルと訓んで差支へなからう。

草枕客有あひだに

(三・四六〇)

草枕客有君が夢にし見ゆる

(四・六二一)

われ客有と妹に告げこそ

(十・二二四九)

の客有は諸注タビナル(リ)と融合縮約形に訓んでゐる。ニアリは連体形ニアルが最も融合縮約形となりやすく、ナルの事例が融合縮約形の大部分を示めてゐる。したがって、客有も諸注の訓で別に不都合とは思はれないが、この場合のアリにはまだ実質的な意味があり、未融合形に訓むのが良いと思ふ。

客有者夜中をさして照る月の高嶋山に隠らくをしも

(九・一六九一)

も諸注タビナレバと訓んでゐる。

多婢奈礼婆おもひたえつも

(十五・三六八六)

からすれば、正に当を得た訓かと思はれる。しかし「多婢尔安礼杼(十五・三六八六)」を加味すると、タビニアレバと訓んでも良ささうである。

客有者君かしのはむ

(十三・三二九一)

はタビナレバ・タビナルと融合縮約形に訓まれてゐるが、「旅をしてゐる」「旅の途中にある」といふ意であるから、アリには実質の意味が濃く、未融合形で訓むのが良からう。者字を漢文における不読の助字と見るか、バを表記したものと見るかは問題であるが、

後有我か恋ひむな

(十三・三二九一)

と対句をなしてゐるのであるから、オクレタルに対して、タビニアルと訓み、者字は不読の漢文の助字と見るべきではなからうか。

此間有而筑紫やいづち

(四・五七四)

此間有而春日やいづち

(八・一五七〇)

客有而物をぞ思ふ

(十二・三一五八)

客有而恋ふればくるし

(十二・三一三六)

等の有而は義訓の用法であり、先年、香椎鴻八号所載の拙稿において、ココニシテ・タビニシテと施訓すべき可能性が極めて強いことを述べたので割愛する。

もいちじるしいことは、前にも指摘しておいたところであるが、

奈良遅那留しまの木立も

(五・八六七)

駿河奈流あべの市道に

(三・二八四)

沼名河の底奈流玉

(十三・三三四七)

わによそり波之奈流子らし

(十四・三四〇八)

乎左刀奈流花橘を

(十四・三五七四)

沖つ島奈流白玉もがも

(十八・四〇一四)

わが背子が宿奈流はぎの

(二十・四四四四)

等伎波奈流ま野のさ枝を

(二十・四五〇一)

の如き事例がナルの大部分を占めてゐる。意味的にも「の」とおきかへてもさして差支へないほどである。特に「地名＋ナル」の場合はほとんど「地名ナル」の形で表はれる。したがって、

青丹よし平城之人の来つつ見るがね(十・一九〇六)

の如く、ナルと訓むべきところを之にて表記した点は意味的にも「奈良の」といふほどのところであり、「其腰之玉(応神記)」と同一手法になるものである。

青丹よし平城有人の待問はば如何に(七・一二一五)

の傍証例に照合してみると、明確である。されば、

春日在三笠の山に

(十・一八八七)

春日在三笠の山に居る雲を

(十二・三三〇九)

春日在三笠の山に月の船出づ

(七・一二九五)

春日有三笠の山は色づきにけり(十・二二一二)
春日有羽買の山ゆ(十・一八二七)

の在・有をナルと訓み、諸注カスガナルと施訓してゐるのも極めて当を得た処置である。勿論、

石見尔有高角山の木の間ゆも(二・一三四)

吉野尔有夏箕の河の(三・三七五)

犬上の鳥籠山尔有いさや川(十一・二七一〇)

高湍尔有のとせの川の(十一・三〇一八)

の如く、尔有と表記した例がないわけではなく、尔有は字面通りニアルと施訓すれば、前記の在・有もニアルと訓むこともできさうに思へるが、尔有はナルを表記したもので、そこには表記者の言語意識が働き、それに基づいた表記意識の現はれであって、諸注の如き傍訓通りの施訓で間違ひではない。同様に、

天有ささらの小野のななふ菅(三・四二〇)

天在ひめの菅原草な苅りそね(七・一二七七)

天在一つ棚橋いかに行かむ(十一・二三六一)

天有哉日月の如くあがもへる(十三・三二四六)

も、

天尔有哉ささらの小野に(十六・三八八七)

からすると、アメニアルと訓むべきかと思はれるかもしれないが、「天尔有哉」もアメナルヤと訓まれるところであり、むしろ、

阿米那流夜おとたなばたの

(神代記)

阿妹那流夜おとたなばたの

(神代紀・上)

によって、諸注の如く、アメナル・アメナルヤと訓むのが
当を得た施訓と言へるであらう。

こもり處の沢泉在石根ゆも通してぞ思ふあが恋ふらく
は (十一・二四四三)

こもり津の沢立見尔有石根ゆも通してぞ思ふ君にあら
なくに (十一・二七九四)

の「在」「尔有」も同様な関係にあり、「尔有」は表記者の
言語意識の顕現されたものと見られ、ともに諸注の如くナ
ルと訓まるべきものと思ふ。

宇都曾見乃人尔有吾哉

(二・一六五)

事出しは誰言尔有鹿

(四・七七六)

もナル・ニアルの両訓があるが、ナルと訓んで差支へない
と思ふ。ただ、次例の

神代より如此尔有良之いにしへも然尔有許曾

(一・一三)

だけは、ニアリが副詞に承接してをり、かかる場合は融合
しにくいこと、前に言及した如くであり、ここはニアリと
訓むのが当を得てゐるのであって、前述の事例とは同一視
することはできない。されば、

倭有わがまつ椿

(一・七三)

辛の崎有いくりにぞ

(二・一三五)

奈良の山有黒木もち

(九・一六六五)

梓弓引津の辺在なのりその花

(七・一二七九)

鹿島在釣する海人を

(九・一六六九)

葦辺在荻の葉さやぎ

(十・二一三四)

かかる例は他にも、二・九一、二・一七二、
三・二七六、三・三一四、三・三七七、三・
三七九、三・四二二、四・五六一、四・五六
一、六・一〇二四、八・一五四八、八・一六
二九、九・一六六五、九・一六六七、九・一
七四〇、九・一七七七、十・一九三〇、十・
一九四八、十・一九九一、十一・二四四四、
十一・二六七二、十一・二六九五、十一・二
七五六、十二・二九一六、十二・三一六四、
十二・三一九〇、十三・三三二九、十六・三
八八九、三・三四九、三・四四〇、七・一三
〇〇、七・一三二七、十・二二二〇、十八・
四〇九四の如くあるが国歌大観番号だけあげ
て割愛する。

の有・在もニアルと訓む可能性はあらうが、ナルと融合縮
約形に訓むのが確例からして適切であるし、スハナル・ス
ハニアル・スハウナルなどと訓まれてゐる。

周防在岩国山を越えむ日は

(四・五六七)

の傍線部も音足らずでもスハナルと訓むのが当を得てゐる
であらう。しかし、

笠たてて盈盛有秋の香のよさ (十・二二三)
の有はナル・ニアルと訓むべきでなく、テアルの融合縮約形にてタルと訓むべきところである。

如是有者なにか殖あけむ (十・一九〇七)

はカクニアラバの融合縮約形カクナラバと訓んだ注釈書もあるが、「可久之安良波ことあげせずとも (十八・四一二四)」「加久之安良婆梅の花にもならましものを (五・八一九)」の確例からして、

如是有者しあや吾背子奥もいかにあらめ

(四・六五九)

とともに、カクシアラバと訓むのが正鵠を得てゐるであらう。

生ける物遂にも死ぬる物尔有者 (三・三四九)

常世有跡みし人ぞなき (三・四四六)

片糸尔雖有たえむともへや (七・一三一六)

人の言こそ繁君尔有 (十二・三一四)

秋の花種尔有等 (十九・四二五五)

の傍線部は

あひ思はぬ君尔安礼也母 (十五・三六九一)

山はしも之自尔安礼登毛 (十七・四〇〇〇)

人の言こそ繁君尔阿礼 (四・六四七)

さへなへぬ美許登尔阿礼婆 (二十・四四三二)

の確例や、既述したヒサニアリ・シカニアリ・サハニアリ

……等を考慮して、ニアレと未融合形に訓むべきであらう。

跡もなき世間尔有者せむすべもなし (三・四六六)

うつせみの世之事尔在者 (三・四八二)

ニアレ・ナレの両訓があるが、「余能許等奈礼婆とどみかねつも (五・八〇五)」を参照すると、ナレと融合縮約形に訓むのがよささうである。「尔有」の表記字面からすれば、ニアレと未融合形に施訓する可能性は十分認められるが、既述したやうに集中他にも「尔有」の事例はあり、ナレバと訓んで差支へあるまい。しかしながら、かかる事例は常に融合縮約するかといふと必ずしもさにあらず、次例の如きもある。

駒造る土師の志婢麻呂白尔有者 (十六・三八四五)

は右の如き西本願寺本の本文によれば、シロニアレバと訓むべきであらうし、尼崎本・類聚古集の古写本によって本文を「白久有者」とするならば(久と尔との草体は誤まれやすい)、シロクアレバと訓むべきであらう。そして、

思へども悲しきものは世間有世間有

(十三・三三三六)

の傍線部はヨノナカニアリまたはヨノナカニゾアル(塙書房万葉集)と訓むのがよからう。

うつせみの代人有者 (九・一七八五・一七八七)

うつせみの世人有者手にまきがたし (四・七二九)

は「うつせみの代人奈礼婆（十七・三九六二）」「うつせみの与能比等奈礼婆（二十・四四〇八）」の傍証例からしてナレバと融合縮約形に訓んで差支へなく、

妹も我も一有加母

（二・二七六）

うつせみの借れる身在者

（三・四六六）

野辺の秋はぎ時_有者今盛_有

（十・二一〇六）

の_有・在_もナレと訓んでよからう。最後の歌の「時_有者」はトキニアレバと未融合形に訓むべき可能性はあるが、同歌に「今盛_有」と有をナリと訓むべく表記した事例もあって、トキナレバと融合形に訓むことはかなり判然としてゐる。

咲く花のにはふが如く今盛_有

（三・三二八）

奥山のあしびの花の今盛_有

（十・一九〇三）

つばすみれ今盛_有

（八・一四四九）

やどのなでしこ花盛_有

（八・一四九六）

の傍線部も

梅の花伊麻左加利奈利

（五・八五〇、八三四）

梅の花伊麻左可利奈理

（五・八二〇）

つばみすれこの春雨に盛奈里鶏利

（八・一四四四）

桜花伊麻左可里奈里

（二十・四三六一）

の傍証例からして、イマサカリナリ・ハナサカリナリと訓むべきことは動かない。さうして、

うゑこなぎ苗有跡いひし

（三・四〇七）

三島菅いまだ苗在
雪みれば未冬_有

（十・二八三六）
（十・一八六二）

あが心天津空_有土はふめども

（十二・二八八七）

妹をおきて心空在_土はふめども

（十一・二五四一）

情空_有土はふめども

（十二・二九五〇）

恋といへば薄事_有

（十二・二九三九）

人妻有跡きけば悲しも

（十二・三一五）

わが心焼くも吾_有

（十三・三二七二）

の_有・在_もニアリ・ナリの両訓が可能ではあるが、

千万の軍奈利ともことあげせず

（六・九七二）

今日もかも都奈里せば

（十五・三七七六）

月見れば同じ国奈里

（十八・四〇七三）

言ふすべのたづきもなきは我身奈里けり

（十八・四〇七八）

月よめばいまだ冬奈里

（二十・四四九二）

さきの盛りは惜しき物奈利

（十七・三九〇四）

うつせみは数なき身奈利

（二十・四四六八）

ふたほがみ悪しけ人奈里

（二十・四三八二）

等の事例からして、ナリと訓んで間違つてはゐまい。意味的にも断定・指定の意が強く、融合縮約形として、ナリと

施訓するのがふさはしい。因みに、

速妻し高_{たかにあり}有_{せは}世婆

（九・一七四六）

大舟の由多_{にあり}尔_{あるらむ}将_{あるらむ}有人の子ゆゑに

（十一・二三六七）

しかすがにかけまくほしき言こと有鴨あるかも

(十二・二九一五)

梅の花たをり招きつあそびに遊あそ有べし可べし有べし (十九・四一七四)

秋の露は移うつしに有ありけり家里 (八・一五四三)

の傍線部はナリと訓む注釈書もあるが、字面に従って傍訓通りニアリと未融合形に施訓するのが格調上からも自然と見なされる。

以上、集中のナリ・ニアリと訓むべき有・在字を逐一考察して来たのであるが、收穫はこれといってあげるべきものもなかった。しかし、大体がナリ・ニアリつまり融合縮約形に訓むか未融合形に訓むかといふのが問題点であるからして、別に刮目すべき結論を期待すべくもない。それを望むこと自体無理であらう。したがって、改めて発表するのも気がすすまぬまま数年はってゐたのであるが、従来あまりにも恣意的とでも言へるぐらゐ、ニアリと訓まれたり、ナリと訓まれたりして、施訓の態度が一貫してゐないため、如何なる場合に未融合形に訓み、また如何なる場合に融合縮約形に訓むべきかもかなり曖昧であつたので、この点を幾分なりとも明らかにし得るところがあればと思ひ、訓法研究の一環としてあへて活字にする次第である。